

## 研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-152	24-018	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 三浦克之
<b>題名 (原題/訳)</b>		
Risk of major depressive increases with increasing frequency of alcohol drinking: a bidirectional two-sample Mendelian randomization analysis 大うつ病のリスクは飲酒頻度の増加とともに増加する：メンデルランダム化の二方向性二標本解析		
<b>執筆者</b>		
Feng W, Zhang B, Duan P, Bi YH, Jin Z, Li X, Zhao X, Zuo K.		
<b>掲載誌</b>		
Front Public Health. 2024 Jun 5;12:1372758. doi: 10.3389/fpubh.2024.1372758. eCollection 2024.		
<b>キーワード</b>		<b>PMID</b>
BMI、アルコール消費者、アルコール摂取頻度、脂肪率、大うつ病		38898891
<b>要 旨</b>		
<p><b>目的：</b>アルコール使用障害がうつ病と併存することを示すエビデンスは増加しているが飲酒と抑うつ症状との因果関係については依然として議論が続いている。本研究はうつ病と飲酒に関して頻度や種類を含む因果関係を評価することを目的とした。</p> <p><b>方法：</b>対象者は遺伝的データを収集したゲノム全域関連研究 (GWAS) および UK Biobank の参加者である。飲酒データは 112, 117 人、大うつ病データは 170, 756 人の患者と 329, 443 人のコントロールを対象に収集された。二標本メンデルランダム化解析を用い、単変量および多変量解析により、飲酒量や頻度、大うつ病性障害との関連を検討した。感度分析では IVW 法、MR-Egger 法、MR-PRESSO 法、加重中央値法などを用いて、潜在的なバイアスを評価した。また媒介分析により、肥満指数や炎症マーカーなどが因果関係に与える影響を検討した。</p> <p><b>結果：</b>飲酒により大うつ病性障害のリスクは低下した (オッズ比 (OR) : 0.71、95%信頼区間 (CI) : 0.54-0.93、<math>p = 0.01</math>)。一方で飲酒頻度の増加により大うつ病性障害のリスクが上昇した (OR: 1.09、95% CI: 1.00-1.18、<math>p = 0.04</math>)。多変量メンデルランダム化解析の結果、飲酒の種類を考慮後でも、飲酒頻度が大うつ病性障害を発症する可能性を促進する効果が持続することが示された (OR: 1.13、95% CI: 1.04-1.23、<math>p = 0.005</math>)。さらに、二段階メンデルランダム化アプローチを用いた媒介分析により、この効果は脂肪率指数によって部分的に媒介されることが明らかになり、媒介割合は 37.5% (95% CI : 0.22-0.38) であった。</p> <p><b>考察：</b>本研究では飲酒が大うつ病性障害を抑制する一方で、飲酒頻度はうつ病を悪化させる可能性が示唆された。これらの知見は、アルコール関連うつ病を対象とした予防・介入戦略の開発に重要な意味を持つ。</p>		